

薔薇のしっぽ



プラスチック製のまっ黄色な洗面器に、たらたらとお湯が注がれる。

冷えたバスルームに健康な湯気が立ち上った。

私はよくお風呂につかりながら本を読んだりワインを飲む。

歌の練習をすることも。。

ここはお気に入りの場所のひとつだ。

床のオレンジ色とレモン色と空色のタイルは 蓮が自分で貼ったもの。
それぞれのタイルの大きさがまちまちだったので
蓮はタイルを砕いてモザイクのように美しいデザインを施した。
ひとつひとつが不定形のそれは合わさるとカラフルでみるからに清潔そう。
彼いわく”南フランス風”なんだそうだ。
確かにそれは気持ちのよい色合いだった。

私は壁をアイスブルーにしたかったのだけど、
お風呂なんだから温かい色がいい と蓮が反対し、結局淡いピンクに落ち着いた。

私がときどき気まぐれに作る白ワインで蒸した鮭みたいな色だ。
これはこれで居心地がいい。
実際、私はここで何か食べることもある。

鮭のテリーヌとグリーンオリーブ、チーズなんかと一緒に
冷えた白ワインを持ち込んでお風呂に入る。
ウイスキーとダークチョコレートというのも好きだ。
炭水化物はやめたほうがいい。おにぎりで懲りた。和食は合わないと思う。
日本酒とつまみくらいならいいかもしれないけれど、それは温泉向きだ。
蓮に言うとも怒られそうだから、これは今のところ
私だけのときの密かな楽しみとなっている。

私は少しだけ顔をあげてサーモン色の壁を見た。
お昼がまだだったことを思い出す。

「おいしそう。。」とつぶやいた私の声に蓮は一瞬、手をとめる。
蓮は私の夫だ。ときどきこうしてシャンプーをしてくれる。

バスルームの壁には大きな窓がある。

窓枠の色は虎さんの映画にでてくるみたいな、氣げんのいい空色。
窓の外には公園の緑がちょっぴり見える。
ここから空を眺めるのが気に入って、私はよく長風呂をする。
明かりを消して夜空の星を探しながらうとうととしてしまうことも。。

私はバスルームの健康のためには観葉植物が必要だと言い張って、
嫌がる蓮を説き伏せて、ビニールみたいにつるつるに光った
大きな葉っぱの鉢植えをひとつ置かせてもらった。

「カビが牛えたらどうするんだよ」

蓮は家の中に植物があるのがあまり好きではない。

「ここは風もよく通るし、日も当たるもの。それに、」
「いざというときにはサラダにするわ!」と言って葉っぱのはしっこをちょっとかじってみた。
苦かったけど我慢して。
いい思いつきだと思ったんだけど却下だ。

蓮に髪を洗ってもらう時は、いつも少しだけ落ち着かない。
なぜなのかはよくわからない。

うっとりするほど素敵だけれど、わけもなく不安になってときどきする。

洗面器を覗き込むと底に描かれてるカエルが笑ってる。
私はカエルを睨み付けてやる。

蓮が、洗面器にたまった湯をカエルごと私の髪にざばあっとかけた。
これで3回目だ。
着ているブラウスの衿からお湯がつたって背中の方に流れるのが気持ち悪い。

蓮の着ている真っ赤な麻のシャツも胸のところから下はびしょぬれだ。

私は自分の着ているブラウスの肩から袖、
手首へと伝わる生温かいお湯が指先から一滴ずつしたたるのを見てから、
はいている生成りの麻のギャザースカートからのぞく自分の足の指を
頭の中でゆっくりと数えてみる。

ペディキュアが剥がれかかっているあまりきれいじゃないな、と思う。

蓮は私のお気に入りの石鹸を手にとると、再び根気良く
いい匂いのしゃぼんを泡立てはじめた。
バスルームが香りで満たされていく。

緑と白い花の香りが濃厚に練り込まれている石鹸の香りは
二人で出かけたパリの街を思い出させる。

6月の気持ちのいいお天気の中、1週間ほどの滞在だった。
二人ともパリは初めてで、見るもの食べるものにいちいち感動し、
街中をくたくたになるまで歩き回った。

大きな苺がたっぷり乗ったタルトはどこで食べても美味しかった。
(日本で食べるタルトと違い、見た目よりもあっさりしていて
いくつでも欲しくなってしまう) 果物屋さんで売っていたサクランボも
味が濃くてびっくりした。

サン・ルイ島で並んで買って見たアイスクリームの味は忘れられないし、
もちろん老舗のカフェで飲むお茶も雰囲気たっぷりで楽しかった。

蓮はそのカフェで使っているカップが気に入ってしまい、隣のショップで
購入しようとしたのだけれど、鍵がかかっている中に入れなかった。

休憩かもね。と、時間をずらして来てみたけれどやっぱり開いてなかった。フランス語はカタコトなので、カフェのギャルソンに聞いてみることもできず、結局カップをあきらめるしかなかったのだった。二人して、フランスだねえ。。と妙な感慨にふけたのも懐かしい。

カフェではご主人様の足下に座って大人しくしている犬たちも可愛くていつか犬を飼いたいねなどと話したものだ。

蓮はパリの女たちのお洒落を観察するのに夢中になり、「スカートをはいてる人が少ない」だの、「みんなあんまりお化粧していないね」だのと女の子みみたいなことを言い、彼女たちの強い香水の匂いに酔った。私はあまり強い香水は好きじゃなかったけれど、パリにいと香りのない自分はずまらないと思えてくるから不思議だ。

香水石鹸は泊まっていたホテルの近くの雑貨屋さんで見つけたもので、香りが気に入っていくつも買い求めた。

そういえば、石鹸はあといくつ残っていたんだっけ？。。これが最後のひとつだったかもしれない。私は寒気を感じてわずかに身をふるわせる。

蓮が湯船のお湯を温めるスイッチを押した。

あたりに飛び散った水滴の中でたくさんのカエルが飛び跳ね、私はやっぱり少しだけ憂鬱になる。

蓮は優しい手つきで私の髪を洗ってくれる。いい匂いのしゃぼんをたっぷり使って。。

なにしろ泡の立て方がていねいだし、男の人の大きな手はそれだけで嬉しい。安心する。いい匂いでいっぱいバスルームは、波立つ感情を洗い流し、生まれ変われる場所でもある。

だから、髪を洗ってもらっているときは信じられないくらい幸せな気分ではいつも泣きたくなくなってしまうのだ。

だけど、今日はいつもとは違う。私は失敗してしまった。

いったい、部屋の中に散らばるラムネの白い粒はいくつくらいあったのだろう。

全ての原因は今日のお天気だ。今朝、窓を開けたら空が青かったのだ。

真っ青な高い、高い秋の空の色。

その青さと明るさを見たたん、私は一気に不安の頂点まで登り詰めてしまった。なぜだか涙がわいてくる。不安と恐怖が襲いかかり、私は胸の奥の心臓を掴まれたようにいてもたってもいられない苦しさにとらわれてしまった。

気持ちを落ち着けたくて、いつもみたいに紫音に語りかけてみる。
紫音は私が小さいころからの友達で、彼は私の心の中に住んでいた。

なにか心配事や困ったことがあると私は真っ先に紫音に聞いてもらう。
ただ、紫音から返事がくることはない。
それでも彼にいてほしいのは、私がひとりぼっちだからだ。
紫音は私をだまって毛布にくるみ、頭をなでてくれる。

でも今日はあまりうまくいかなかった。
紫音は出てきてくれない。

そのうち私はラムネをほおばっている自分に気づいた。
口の中がじゃりじゃりする。
のどにつかえている粒のせいで私はむせて、息ができない。
私はソファから転がり落ちてしまう。
思いのほか大きくドスンという音が響く。
蓮が来てくれるに違いない。
そう思うとちょっと安心したけれど、静まりかえった部屋にいるのは私だけだった。

どこかで笑い声が聴こえたような気がして振り向くけど、誰もいない。

とたんに咳き込んで、口の中からラムネの粒が飛び出した。
オフホワイトの毛足の短い絨毯の上に湿ったラムネの粒がくっついた。
今朝、私がいてねいに（でもないけど）掃除機をかけたばかりだ。
それを見た途端、無性にくやしくて涙が溢れ出す。

大きな声をあげてしゃくりあげていると、仕事部屋から異変を察知した
蓮が顔色を変えて飛び出してきた。

「どうしたの?!」蓮は私を見たが、おびえたようにかたい表情を浮かべている。

私は笑ってみようと思ったけど、変な声しか出ない。
蓮は不機嫌な顔をして私の様子を伺っている。

私はすぐに後悔した。

いつも、こうやって蓮を怒らせてしまうのだ。

違う!こんなじゃないの!私は心の中で叫ぶ。

絶望的な気分になっていく。
みっともなく情けなくてハラが立つ。

蓮は恐い顔のまま、私をバスルームに引っ張っていった。

お風呂の蓋を乱暴に開けると、私の頭を水につけた。
口と鼻から水が入ってきて私は慌てた。
こういうときの蓮はこわい。
殺されるかもしれないと思うほどだ。

逃げ出そうともがくほど、強い力で押さえつけられてしまう。
「いやっ!放してっ!」

「吐けっ！吐くんだよ！」
身をよじって抜け出そうとしたけれど、蓮は動かない。
私の背中を強くたたき、口の中に指を突っ込んだ。
痛い。
気持ち悪いのと苦しいのとで私は胃袋の中にたまっていた
ラムネを吐き出した。
蓮はやっと力を緩めてくれる。

口の中が苦くてむかむかしたけれど、ありったけの力を
振り絞って泣いた後は体中が綿みたいに力が抜けてしまった。

遠い記憶がかすかによみがえってくる。
子供の頃に見た母の顔がぼんやりと浮かんでは消えた。
それは幸せな記憶と辛い記憶。
私は慌てて思い出に蓋をする。

「どうしてこういうことをするの。。。」蓮が小さくつぶやいた。
その声には非難よりも悲しみがこもり、
蓮の絶望はするどいトゲとなって私の心に突き刺さる。

私はすっかり反省し、蓮の顔色を伺いながら「ごめんなさい」と謝った。
返事はない。
蓮が許してはくれないのだと悟る。
でも今の私には、ほかに何ができるだろう？

蓮は黙って黄色い洗面器にお湯を溜め、しゃぼんを泡立てる。
そして私の髪にたっぷりとぷくぷくの泡をのせると、
もう一度、ゆっくりと髪を洗いはじめた。
まるで、そうすることでなにかも元通りになるみたいに。。。

口の中で血の味がする。
さっき、どこかにぶつけたのだろう。

唐突にお風呂のチャイムが鳴った。
浴槽のお湯があたたまっただ。

これでお風呂に浸かって体を温められる。
お風呂からあがったら、蓮にココアをいれてあげよう。
私は少しだけ落ち着きをとりもどし、そう思った。

窓から午後の光がやわらかく差し込んで、鉢植えの緑には水滴の
丸い粒がたくさん輝いている。

バスルームは明るく平和そのもので、カエルたちは残らず姿を消していた。

星空

梨子が夢の話始めた。
僕は目をつむって聞く振りをする。

「。。。そこにはね、穴があって中から女の人が私を見ているの。
びっくりしたわ。階段があって、その階段は逆さまについているのよ。
女の人はその穴から出てこようとしてた。
その様子がすごく変なの。恐くて逃げようとする、女は蓮になるのよ」

梨子の声は深刻そのものだ。
まるで夢が現実であるかのように熱っぽく語る。

梨子の夢は怖い。
僕はほんとに泣きそうになる。
本当は聞きたくないのだが、途中で口を挟むと後が大変なのだ。
ときどき夢の話でケンカになることもあるくらいだ。
誰かに話をしないと気がすまないらしく、
僕がいるときは必ず聞かされることになる。
ひととおり話すと落ち着くので、諦めて聞いてやることにしている。

梨子の叫び声で目が覚めることもしょっちゅうだ。
心臓が飛び出るかと思うくらいびっくりする
ようなきみのわるい声で叫び、泣く。

どうして梨子がそんな夢を見るのか僕には見当がつかない。

結婚してからいつもこうだ。

梨子と知り合ったのは丁度1年前。
仕事帰りに立ち寄ったバーでマスターが慌てていた。

何回か通って顔見知りになったお客が酔っぱらったあげく、
ふらふらと外へ出たまま戻らないという。

「ほっとけば。帰ったんじゃないの？」僕が言うと、マスターは
「ちょっと心配な娘なんです。店も閉める時間だし、探してみます。」と言う。
僕は「女の子なの？それは心配だね」とにやにやした。
マスターが顔色ひとつ変えずに「そうですね」と言ったのを見て
なんだか僕も心配になった。

結局、マスターに付き合っただけで近所を一緒に探したら、
毛糸玉みたいな髪の毛の小さい娘が酔っぱらって警察官に職務質問されているところを見つけた。
それが梨子だった。
彼女は僕とマスターを見るときすごく嬉しそうに顔を上げてにまーっと笑った。

警察官は世話のかかる相手から解放されてさっさと姿を消してしまった。
マスターに送ってあげてくださいと頼まれて僕は正直あきれたが、
仕方なく彼女を家まで送ったのだ。
電車は終電が一本残っていた。
彼女の家に着くと「飲んでく？」と聞かれたが断って帰った。
玄関先で彼女は「バイバイ」と無邪気に手を振っていた。
やれやれだ。

それっきり、梨子とはしばらく会わなかった。

偶然の再開は思わぬ形でやってくる。
梨子のことなどすっかり忘れた或る日の夜、友人のカメラマンから撮影が思いのほか
はかどって早く終わったと連絡があり、一緒に食事することになった。
他のスタッフとも一緒だったのだが、その中にいたのが梨子だったのだ。

皆で一緒に和食を食べに行っただ。
梨子はとてもよく食べて、よく飲んだ。
明るく笑い、きれいな声で話す。
好奇心に満ちた瞳がきらきらして、どこか子供っぽい話し方もかわいかった。
なんだか昔からの知り合いと話しているような気がして、僕と梨子はすぐに親しくなった。

付き合いだしてから結婚するまであつという間だった。
けれど結婚する少し前から僕は梨子がときおり見せる不安定な様子が気がかりだったのだ。

突然泣き出したり、僕の仕事場に差し入れを持って訪ねてきては仕事仲間の女の子と仲好
くなくて僕のことをいろいろ聞き出したりしていたようだ。
僕は少しとまどったけど、その時はそれほど気にはしていなかった。
全て、結婚前の不安がそうさせているのだとばかり思っていた。

でも現実はどうじゃなかった。

僕が彼女に対して誠実であろうとすればするほど彼女は不安定さを増すように見えた。

たぶん、僕が至らないのだろう。。

梨子が僕の腕から抜け出そうと寝返りをうつ。氣をとりなおして、梨子の頭をなでてやる。夢にどっぷりつかっていたらしい梨子は、はっと我に返って安心したように僕のふとんに潜り込む。

「蓮に聞いてもらおうと安心するの。ありがとう」梨子が小さな声で言った。あまりに素直な声だったから、僕は罪悪感さえ感じてしまう。

慌てて梨子のおでこにキスをして抱きしめる。胸のところで丸くなっている梨子の髪から石鹸の香りがする。僕が洗ってやったのだ。梨子は僕が髪を洗ってやるとすごく喜ぶ。とても無邪気に。僕はそんな梨子を見るのが嬉しい。彼女の笑顔を見るとほっとする。元気でいてくれるなら、髪を洗ってやるくらいはどうということはないのだ。

しばらく前、梨子は自殺を図った。

梨子が睡眠薬を大量に口から吐き出しているのを見たときはぞっとした。梨子はぐしゃぐしゃになって腫れたような赤い顔をして、涙と鼻水を垂らしていた。僕の顔を見て激しく動揺した。表情からは彼女がどんなだかは見当がつかなかった。梨子は壊れたような声で笑ったり泣いたりしている。本当に頭がおかしくなったのかもしれない。恐ろしい光景だった。

料理用のワインを飲んで、睡眠薬をほおぼるなんてどうやったら思い付くんだろう。悪い冗談だ。僕は梨子のそういうところが嫌いだ。悲しくなる。

僕がどんなに努力しても優しくしても意味はないのだと言われているようで心底絶望した。

ふる場で睡眠薬を吐かせてから髪を洗ってやると梨子はやっと落ち着いた。かかりつけのクリニックに電話で相談したが、落ち着いているなら少し様子を見るように言われ、翌日すぐにクリニックに行くことにして、ひとまず休ませたのだ。

彼女が気に入っている部屋着に着替えさせ、温かい紅茶をのませた。両手でカフェオレボウルを抱えて毛布にくるまりリビングの真ん中に座っている梨子はぼつんとして小さく、なんだか本当にひとりぼっちに見える。僕のことは既に眼中になくぼんやりと窓の外を眺めていた。

夕暮れの空は蒼く、星も輝き始めている。半分だけ開けた窓から入ってくる風は冷たく、夜の匂いがした。

空のはしっこの方に少しだけ残っている紫色の薄暮を見ているうちにやりきれない気持ちになって、氣がつくと僕は梨子の後ろ姿を見ながら涙を流していた。。。

すやすやと寝息をたてはじめた梨子にふとんをかけなおし、僕も寝返りをうつ。

暗い部屋の中で、眼をこらすと天井からぶらさがっているモバイルが風もないのにゆっくりと動いているのが見えた。危ういバランス。

僕は強い恐怖を覚える。

こんな生活、いったいつまで続くのだろう。僕には自信がない。

梨子とやっていく自信が。

僕の方が先にまいってしまいそうだ。

普段、仕事部屋で僕はよく考え事をする。

カレンダーやポスターのデザインをしながら明るい未来を思い描いてみる。

僕の知ってる梨子は薄気味悪い夢など見ないし、いつも笑っている。
ときどき、びっくりするような変な料理を作ったりするけれど、
無邪気な彼女のが好きだ。
元気になった梨子を連れて、旅行もしたいな、なんて考えてみる。

だが、梨子は本当に良くなるのだろうか？

もし、あのとき梨子に会っていなかったら。
今の僕はどんな暮らしをしているだろう。

様々なことに考えを廻らせているうちに、頭が本格的に冴えてきてしまう。

隣を見ると、梨子は安心して眠っている。

僕がこんなことを考えているとも知らずに。
割に会わないよなあ。。。そう、つぶやいた自分の声が弱々しく、笑ってしまう。

明日は日曜日。梨子は晴れたらピクニックに行くのだと張り切っていた。
今のところ雨の確率は50%だ。

オルゴール時計

朝、水の音で目が覚めた。
一瞬雨かしらと思ったら、蓮がシャワーを使っている音だった。

今日は蓮と一緒にクリニックに行く日。
診てもらうのは私だけけれど、いつもは一人でいくのに今日は蓮と一緒にだからとても嬉しい。

私の通っているクリニックの先生は丸顔のにこやかな先生で、診察の様子をテープに撮らせてくれる。
知らなかったけれど、これってとても珍しいことらしい。
私もいつもテープを撮るけれど、なぜだか家で聞き返したことはない。

蓮はこの間、私が安定剤をよけいに飲もうとしたことを心配している。
私が安定剤のことをラムネみたいなものだと思っていることにも腹をたてているらしかった。

蓮がシャワーを使っている間、しばらく『私の部屋』にいることにする。
私の部屋は小さくてとてもかわいい。
自分で壁も塗ったし、花の絵も描いてある。
白っぽいオレンジ色の暖かみのある部屋だ。

私はタオルケットにくるまって、部屋でじっとしている。
落ち着かない気持ちのときや、心配事のある時、私は心の中の紫音という少年と会話する。

彼は私が子供の頃からそこにいて、会いたくなったら眼を閉じて、心の中を見ればいい。
彼はいつもどんなときも私をはげましてくれる。
私はすっかり彼を頼りきっていた。

でもあまり長く彼と話している時間はない。

しばらくするとシャワーの音がやんだ。
キッチンに蓮が移動する気配がして、冷蔵庫のドアを開けたり閉めたりしている音がする。
蓮はシャワーの後でいつも冷蔵庫を開けて、牛乳を出し、グラスに入れて飲む。

私は部屋を出て、リビングに急いだ。
テーブルの上には生成りの麻でできたお気に入りのランチョンマットが敷かれ、
いつもの白くて丸いお皿がセットしてある。

振り返るとキッチンから顔を出した蓮が口の周りに牛乳の白い輪っかをつけたまま、
『起きた？朝ごはんにしよう』と声をかけてくれた。

「うん！」と元気良く答えると私はすっかりいい気分になって、コーヒーをいれる準備をする。

豆で買ってあるキリマンジャロを丁寧に手動式のミルで挽いた。
沸いている薬缶のお湯を注意深く注ぐとたちまちコーヒーの良い香りがあたりを満ちし、
なんだか自分がコマースシャルの一場面になったような気がしてくる。

蓮は買ってきたベーグルを暖めてハムと野菜とスライスチーズをはさみ、
テーブルの上の白いお皿の真ん中に置いた。
私はあんまりベーグルは好きじゃないけれど蓮は穴のあいたこのパンが好きなのだ。
私は冷蔵庫から牛乳パックを出してきて、大きなマグに半分くらい入れる。
熱いコーヒーを注いでカフェオレの出来上がりだ。
こうすると熱くなくて飲みやすい。

私は昨日の夜見た夢の話をしたかったけれど、蓮がキゲンを損ねると困るのでやめた。
代わりに観たい映画の話なんかをした。
単館ロードショーが好きな蓮がめずらしく『クリニックに行った帰りにでも観ようか？』と誘ってくれる。

ハリウッドの映画にはあまり興味のない彼と一緒に映画を観てくれるというのだ。
嬉しさに決まってる。

何しろ、二人には共通の趣味っていうものがないんだから。
結婚して、荷物を整理しているとき、だぶって持っているCDが一枚もなかったし、
遊びに行きたいところもまるでちがう。

今日はついてるな〜と考えながら、クリニックの先生のいつもの質問を思い出した。

「自分のことを好きですか？」

ええ、今日はね。。。と心の中で私は答える。

今日はなんだか全てがうまくいきそうだし、気分もいい感じ。

でもせっかくクリニックに行くんだから、安定剤事件のことは話した方がいいだろうな。なんて考えた。

時計を見ると9時で、私はちょっとだけ安心する。

まだ、午前中だ。

「まだ、午前中。。。」「こんな風に思えるようになったのだから私の具合もだいぶよくなったんだろうと思う。

ライターをしている頃は、朝が来るのが辛かった。毎朝、起きて窓の外のをみたたん、吐き気がするのだ。

「空が。。。青い。」と、言って泣き出してしまうことも度々だった。なぜだかお天気がいい朝は特に憂鬱になってしまう。一緒に暮らしていた妹もさぞかし困ったに違いない。泣く私をなだめたりすかしたりしてクリニックまで付き添ってくれたこともあった。

当時つき合っていた彼とうまく行かなくなってから私の病気はエスカレートしていった。毎晩のように、飲み歩き、薬の副差用で記憶を失うこともあった。知り合いのバーでマスターに散々愚痴をこぼしたあとで、氣を失って救急車で運ばれたこともある。そんな風だったから、仕事もうまくできるはずもない。

蓮と出合ったのはその頃だ。

お酒を飲んで泣きながら街をほっつき歩いて、オルゴールの時計台が目印の大きな映画館の下で大の字になって泣いているところをおまわりさんに職務質問され、しどろもどろになっている私をバーのマスターが見つけて引き取ってくれたのだ。そのときにマスターと一緒にいたのが蓮だった。蓮は心配そうに私を見ていた。私も蓮を見た。着心地の良さそうなシャツとジーンズ。きれいな形の目とくちびるが清潔な感じ。私は一目で蓮が好きになってしまった。蓮は帰る方向が一緒だからと、私の家まで送ってくれたのだ。

『山下さん。。。』名前を呼ばれて、我に返った。そうだ、蓮と一緒にクリニックに来たんだ。二人で診察室に入る。先生はいつものようににこやかだ。ここへ来ると、いつもなぜか頭の中が真っ白になってしまう。自分がとてもマヌケになったような気がする。先生に聞いてもらおうと思っていることがたくさんあったはずなのに。。

蓮が先生にこの間のラムネの話をした。先生は蓮の目を見て真剣に聞いたあと、私に向き直るとにっこり笑った。

「自分を大切にしようね。」

私は『大事に・・・』と繰り返すのが精一杯。

先生は続けて言う。「自分が苦しくなる方向じゃなくて、自分が楽になる方に行くようにするといいんだね。」

ここで先生は私の顔を覗き込むようにした。私が聞いているかどうかかかっている。

私ははっとしたけれど、どうすれば楽になるのかを聞くことは忘れてぼーっとしてしまう。

「お薬、まだあるかな？」「もうあんまりないです。。」

蓮が薬のことをいかけると先生がさえぎる。「大丈夫ですから。そんな強いお薬じゃないですから」と。蓮は私がまたあのラムネみたいな安定剤を大量に飲んだら死んでしまうと思ったのだ。

すぐに診察が済み、部屋を出ようとすると、先生が「しばらくやってないから採血をしましょう」と私に言い、蓮にはそのまま待つように言った。

蓮を置いて採血室に行き、看護婦さんに血を採ってもらう。今日の看護婦さんは採血がへたで痛かった。「痛い！私は練習台じゃないのよ！」私は彼女を睨んで悪態をついた。

看護婦は薄笑いを浮かべただけだった。

帰りに薬局で薬をもらい、やっと安心する。
薬剤師さんが、お薬の説明をしてくれ、いままでより少し眠くなるお薬ですと話しているのを聞いて眠くなるのはいやだな。。とぼんやり思う。

蓮と先生とで何か話したのだろう。
私は自分の病気があまり良くなっていない気がして、ちょっとブルーになった。

クリニックの近くのラーメン屋でお昼にし、帰りに映画を観た。
蓮に初めてあった場所にある映画館だった。
蓮は覚えていただろうか。
映画館は思いのほか混んでいて、私と蓮の席は最前列だったので首が疲れたがストーリーは展開が早く、面白かった。

途中のラブシーンで紫音のことを考えたけど、今は蓮といるのだから。。と言いつけさせる。
映画が終わって外にでると猛烈にお腹がすいていた。
蓮が『今夜は寿司にしよう』と言う。
回転寿司に入ることに決め、家の近くにある評判のいいお店でたらふく食べた。

蓮も私も機嫌よく、次々とお寿司を平らげた。
雲丹、甘エビ、中トロにいかのお寿司、茶わん蒸しやかにのお味噌汁も食べた。
先生にはとめられているのだけれど、お酒も少しだけいただいた。

帰り道の公園でダンスをしながら歩き、私は歌を歌った。

♪ぼくらはみんな生きている
生きているから 悲しいんだ～

歌いながらクルクル回って踊る。
お酒の酔いが私を上機嫌にさせている。

蓮は公園のブランコに腰かけて笑いながらそんな私を見ていた。

今夜はすぐに眠れそうな気がする。
そうしたら、夢の中でダンスの続きをしよう。。

モンブラン

このところ、梨子の調子は良くなったり、悪くなったりして落ち着かない。昨日は、仕事で打ち合わせに出て遅くなった。電話をしたが梨子が出ない。

家に帰ると玄関に梨子の部屋があった。

いつもはリビングに置いてあるはずなのに。。
お客が来る時は大切にたたんでしまっている。
他の人には観られたくないらしい。

梨子の部屋（というのは彼女がそう呼んでいるのだが）は大きな段ボールでできている。引越しのときに使ったものの残りを利用して、梨子で作ったものだ。全体に色が塗ってあって、花の絵やうさぎだかぞうだかの絵も描いてある。なかなかの力作だ。
梨子はときどきタオルケットにくるまってその中に入る。

今日は、機嫌があまりよくないのか、それともびっくりさせたいだけなのか、いったいどっちだろうと僕は身構える。びっくりさせたいのならまだいい。僕も付き合っただけで驚いてあげようかと思いつく。だが、機嫌がよくないなら。。。最悪の事態を考えて、ゆっくりと用心しながら声をかける。

「ただいま。梨子？」

「.....」

返事がない。
こういうときはとてもやっかいだ。
めんどくさいが、僕は心を落ち着けようと軽く深呼吸して、もう一度声をかける。

「どうしたの？」

「蓮・・・が・・・少ない」

小さな声で段ボールの中から返事があった。
あまり調子が良くないらようだ。

しばし考えてから僕はゆっくりと提案してみる。

『出ておいで。おみやげがあるよ。』

返事がないので、仕方なく、そのまま待つ。
たっぷり5分は待たせようか。
もうだめか。。と諦めかけた時、

「おみやげって何？」

さっきよりいくぶん大きな声だ。
どうやらうまくいったらしい。
僕は努力して明るい声で言う。
『梨子の大好きなプリンタンのモンブランだよ。白ワインもあるよ』

梨子はぴょこんと段ボールから顔を出した。
僕を睨みつけている。

僕は仕方なく笑ってみせる。

ふいに「出して！」と彼女は言った。

両手を広げて抱っここのポーズだ。
(ずっと入っているのは疲れるらしい)

僕はやれやれという気分で梨子を段ボールから引っぱりだしてやる。

梨子は（まだ機嫌がよくなったわけじゃないのよ、という態度丸出しで）一応、「おかえり」と言い、

僕は型通りに梨子を抱きしめてキスをする。

これは家の習慣だ。
クリニックの先生にすすめられたこともあって続けている。
スキンシップってやつだ。
これをしないと梨子が不安がる。
最初は面倒くさいと思っていたが、今では僕もそうしないと何か忘れ物をしたような気になるから不思議だ。

しばらく前に梨子と一緒にクリニックに行ったとき、主治医の先生に梨子の薬のことを相談する機会があった。
先生によれば、梨子の薬はあやまって大量に飲んでも大事に至ることはないそうだ。
ただ、そういう徴候のあるときは早めに受診させるように言われる。
そして、朝きちんと起きて、夜早く寝るという生活を続けることが回復には最も有効だということだった。

僕は自分が梨子にしてやれることはないのか聞いてみたが、答えは残酷だった。
「あなたにできることはありません。」
はっきりとそう言われた。

僕はショックを受けた。
自分の力の無さを指摘されたように感じて不愉快ですらある。

僕は梨子に何もしてやることができない。
こんな情けない話があるだろうか？

それなら存在する意味がない。
一緒にいてもしょうがないじゃないか。
そんな気がしてくる。

『本人が気づいていくことが大切なんです。』
先生は僕の心を見透かしたように言った。

「梨子さんが自分自身を信頼し、好きになる
ことができれば変わります。
大丈夫。必ずよくなりますよ。
それまで見守ってあげることです」
先生はそう言うと言った。

段ボールから出て、ようやく機嫌を直したらしい梨子は
僕の手からおみやげをひったくり、中を確かめてからにっこり笑った。

「蓮が遅いから、心配したのよ。
お茶をいれましょうね。
あ、ワインがあるんだっけ。
でも冷えてないし。。。。
ま、いいか。氷をいれるわね！」

おいおい。。。僕は心の中でつぶやく。
梨子が待ってたのは僕じゃなくてワイン？
しかも氷を入れるだなんて。。。

梨子は嬉々としてケーキを食べる準備をしている。
鼻歌まじりで。。。。
もう時計は真夜中をまわっている。
梨子は早く寝かせないといけないのだが、こういうときに口を挟むとごねて大変だ。
1時には寝られるかな。時計を見ながら思う。

僕はふと、思い出す。
先生に聞けなかったことを。

梨子は本当によくなるんですか？。。。。
梨子の病気はきつともうよくなるらない。。。
僕はそんな気がしている。

ときどき梨子が誰かと話している（妄想だが）様子があまりに奇妙で尋常ではないからだ。

梨子の話し相手の名前は”シオン”とかいうきざな名前らしい。
寝言でつぶやくことがあるし、梨子がひとりのときそいつの名前を
呼んでいるのを何度か聞いたことがある。
梨子は僕がそいつのことを知らないと思っている。

こんな話をするとまるで浮気妻をもった亭主の気の毒な身の上相談か、
あるいは僕が病気だと思われそうで先生には言い出せなかったのだ。

たぶん梨子の妄想だろう。
これ以上は疲れて考えられない。
僕にできることはただひとつ。
考えるのをやめることだ。
それだけが僕の健康を守ってくれる。

梨子は大好物のモンブランを食べて満足そうだった。
口のまわりにクリームをつけたままにこにこしている様子はどうみてもお子様だ。
紅茶とワインを両方飲んで「おながたぶんだわ」といいながら
タオルケットをひきずってベッドに行く。
僕はモンブランを半分食べ、紅茶を飲んだ。

「歯をみがきなさい！」

梨子に聞こえるように言う。

「はあい」と嫌そうに返事があった。

三日月とライオン

部屋の中にはたくさんの動物がいた。

きりにサイ、ぞうにライオン。。。
レンガのお家や花たちもある。
それらは全部手の平に収まるサイズで、
びっくりするほどたくさんあった。

その部屋は壁面が柵になっていて、小さな動物や家たちが
きちんとあるべき場所に収められている。
いつでも遊んでいいよ、と言っているような、
まるで子供部屋のような空間は、なんだか懐かしい感じだった。

私はカウンセラーに促されるままに木でできた椅子に座る。
木の感触は冷んやりとしていたけれど、座ると木の温もりを感じた。
大きなテーブルもやっぱり木でできていて、その上には箱が置いてあり、
中には白い砂がたっぷり入って小さくキラキラ輝いていた。

(箱庭療法っていうのがこれだな。。。) 私は心の中で思う。
「好きなものを使って、好きなものを作ってください」とカウンセラーが言う。
私はあいまいに笑ってうなづいた。

作りたいものって何だろう？

心の中を覗いてみるけれど、そこにはなにもなかった。

カウンセラーがちょっと困った顔をしている。

私のカウンセラーはまあいい顔で禿げている。
優しい、温厚な印象のおじさんだ。

カウンセラーだと名乗らなければ、サラリーマンかと思っただろう。
反応しない私を見て、声をかけるタイミングを計っているのがわかる。
私は彼のそんな様子が気の毒になったけれど
何も浮かばないんだもの。。。しょうがない。

何も作る気にはなれないけれど、箱に手を入れて砂に触れてみる。

私は手のひらに砂をすくい、サラサラとこぼした。
細かく、乾いた砂のひんやりとした感触が心地よい。

ずいぶん長い間、そうしていた。
何も作りたくない。
私はただ、こうしていたいと思い始めていた。
カウンセラーは部屋のすみっこでやっぱり心配そうに私を見ている。

そのとき、砂をいじっていた私の手がふっと砂の底に触れた。
明るいブルーの色彩。
私はハッとする。
そこに、青い湖が現れたのだ。

それは本当にショックとっていい驚きで、
思わず声をあげてしまったほどだ。
(湖と言っても青く塗られた箱の底が見えただけだけれど。。。)
でも、それは本当に美しい色だった。

明るい、明るい澄んだ青い色。

私は青い湖を飽くことなく見つめた。
とても、とても懐かしいブルー。。。。

すると、頭の中に絵が出来た。

私は湖を月の形に整えるとミニチュアのばらを持ってきて、
カウンセラーに切っていいかと尋ねた。
自由にしていっていいことだったのでさっそくばらを一輪切ると、
湖のそばに植えてみる。

つぎに必要なのはライオンだ。
イメージに近いライオンを探し、ばらの傍らに置く。
仕上げは月で、これは紙を切って作った。
カウンセラーに棒を用意してもらい先端に月をとりつけた。
それを湖を見下ろす砂の丘に刺す。
出来上がりだ。

私はこれがとても気に入った。

月に照らされた三日月形の湖一。
そのほとりでライオンは静かに水を飲んでいる。
傍らにはばらが一輪。
これらの光景は私をほっとさせてくれた。

蓮にも見てもらいたいと思う。
でも、思うだけで彼を本当にここに連れてこようとは思わない。
ここは私のオアシスだから。。。

蓮とセックスをしなくなってからもうずいぶん経つ。
どうしてそうなったのかわからない。
私が流産したせいかもしれない。
でもそれだけじゃないことぐらい私にはわかっている。

蓮には恋人がいるのだ。
同じ仕事関係の女の人らしい。
蓮は彼女とよくごはんを食べに行く。
一度、まったく偶然に同じ店で二人と会った。
結婚前から蓮と一緒に通っていたバーで。

驚いたことに蓮は彼女を紹介してくれた。
とてもこやかに。
彼女の方は私を見て緊張してるのがわかった。
悲しかったのはマスターの態度だ。
私の顔を見てすごく慌ててた。
私は彼女が蓮の恋人だとわかったから、
にこやかに笑って先に店を出たのだ。

今夜も遅いんだろうな。。。

だから、蓮は、私にはすごく優しいのだ。
家庭を壊すようなことはしないだろうと思う。
私はそれが苦しい。

お義母さんにまで相談した。
すごく心配してくれたけれど、解決にはなるはずもない。
もっとも、夫の母親にこういうことを相談する事自体おかしいのかもしれない。
変な嫁だと思ってるだろうな。。いや、違う。
息子もやっかいな女と一緒にになったと思っているんだろう。。
息子の嫁は頭が少し変なだけじゃなくて、子供も望めそうにないのだ。
以来、義母が私に子供はまだかと聞くことは無くなった。

孫の顔を見ることを楽しみにしている両親には申し訳ないと思っている。
相談なんてするんじゃないやな。。。

心配をかけただけだ。

私はまたも無力感に襲われる。
「女としても役立たずか。。』卑屈につぶやく。

私の胸の中には紫音がいるだけだ。
紫音は私の胸の中で生きている。
小さいときからずっと一緒だった。
私の話を否定せずに聞いてくれるのは紫音しかいなかったのだ。

でも紫音には恋人がいる。
ひとまわり年上の恋人だ。いつの間にかそうになっていた。
彼女の顔はいつも見えないけれど、彼女は紫音に愛されている。
私は彼女がうらやましい。
紫音は彼女のことを好きで好きで仕方がないからだ。
紫音は絶対に彼女を泣かせたりしない。
いつも彼女のことだけを想っているのだ。
私の胸の中で紫音と彼女は結ばれる。
それはうっとりするほど濃密に。。
私は恍惚としてしまう。
あんなふうに愛されてみたいと思う。

私は彼女がいないときに紫音に会う。
紫音に私の悲しみや喜びを聞いてもらう。
紫音はすゞやかな眼をして微笑み、黙って私の話に耳を傾ける。

でも彼は何故、私の胸の中にいるのだろうか？
何故、蓮じゃないんだろう。。。

愛しているのに胸の中に彼の住まいはない。

カウンセラーの先生が箱庭の写真を撮ってくれた。
次回のときに渡しますと言われ、私はありがとうございます。と、
ぺこりと頭を下げた。

外に出ると、空には本物の月がかかり、道には夕食のカレーの匂いが漂っている。
今夜はおすしにしよう。
蓮が美味しいと言ってくれた鰻ときゅうりのおすしだ。
そう決めると私は少し元気になり、坂道を駅へと急いだ。

チョコレート

カフェは混んでいた。

テーブルの上の紅茶のポットにはふっくらしたカバーがかけられている。
ついている砂時計の砂が落ちるのを待って、夏美がカップに二人分の熱い紅茶を注いだ。
夏美は僕の仕事仲間だ。

正確には元彼女と言ったほうがいいのかもしれない。
それだけでなくとも彼女は高校時代からの友人だから、付き合いは相当に古い。

ふっくらとした頬と大きな瞳が年齢よりもずっと彼女を若くみせている。
フレンチネイルを施した彼女の指を僕は見た。
フリーのコピーライターとして働く彼女は、相当に忙しく、
もうこの仕事ではベテランと言っていい。
今日は打ち合わせを兼ねてのランチだった。

彼女がお茶をいれてくれるのを待って、僕は話し始めた。

「この頃、おふくろがうるさくてさ。。早く子供を作れって。
いままでそんなこと言いましなかったのに。」

「何かあったの？ 梨子さんと。」
『何もないさ。』

一瞬沈黙があり、夏美が確かめるような口調で言う。

「まだ、梨子さんとはできないの？」
僕は紅茶に視線を落とし、軽くうなづいた。

夏美には梨子との生活のほとんどを話している。
何故だか彼女には何でも話せるのだ。

「そう。。。」と、言って目を伏せると夏美はカップの中の紅茶を見つめた。

「別れようかと思ってるんだ。」
自ら切り出した言葉に自分でも驚きながら、僕は言った。
夏美は真面目な顔で僕を見ている。心なしか、顔が青ざめて見える。

「本気なの？」

「・・・うん。」と、答えてしまってから僕は後悔した。
何故だかとても楽な気持ちになっている自分がある。
そんな自分を責める気持ちが湧いてくる。

「梨子さんの具合が悪いから？ まあ、無理ないか。。。
でも別れるとなるといろいろと大変よ。」

淡々と話す夏美の言葉を聞きながら、僕は一人に戻った未来のことを考える。

どこか遠くの町へ旅に出たような心もとない感じ。
僕は密かにそれを夢見ている。

一人になれば、真夜中に梨子の泣き声で目を覚ますこともない。
仕事中でも関係なくしょっちゅう話し掛けてくる梨子の相手をしてやらなくてもすむ。

変なタイトルのついた妙な物を食べさせられることもない。

(料理はヘタではないのだが、ときどきびっくりするものが出てくるのだ。

この間はお茶漬けが食べたいと言ったら、紅茶をかけたものを出してきた。

梨子は平気な顔で「イギリス風よ」とか言う。)

彼女の機嫌を伺って、はれ物にさわるようにしていなくてもすむ。

彼女がちゃんと薬を飲んだかどうか気にしなくてもいい。

何より具合の悪い彼女を見なくてもすむ。

いや、具合の悪い彼女の面倒をみたくないという自分の冷たい心を見なくてすむ。

こんなことを考える僕は薄情だろうか？

「・・・ねえ、蓮？ 聞ってる？」夏美の怒った声にはっと我にかえった。

「梨子さんとちゃんと話した方がいいわよ。」

「ああ。話をしないわけにもいかないだろ。。」

僕は夏美にこの間のクリニックのことを話してみた。

「クリニックの先生に、相談してみたよ。

僕自身、梨子と少し距離をおこうと考えていることをね。

このままでは僕がもたないと思うって。。」

「先生は何て？」夏美はバッグから赤い箱を出して、
中からチョコレートを2粒、僕に渡してよこしながら聞いた。

僕は銀色の包み紙をほつきながら夏美に説明する。

「自分で判断してかまわないってさ。

反対されるかと思ったから、ちょっと拍子抜けしたんだけど。

それで、僕は言ったんだ。

すぐに離婚をするつもりはないって。。

梨子も今、いきなりひとりでは生活できないだろうし。」

夏美は黙ってうなづいている。

僕は続けた。

「別居っていう形にしようと思うんだ。

仕事を別に移して、そこで暮らそうと思う。

梨子としばらく離れてみて、続けていくのがやはり

無理だと感じたら、そのときは別れるしかないだろうね。」

気持ちの複雑さと裏腹に口の中に入れたチョコだけが甘く溶けていく。

「そう。。」とだけ、夏美は言ってティーカップのお茶を飲んだ。
そのあとは、この話題には触れず、二人とも仕事の打ち合わせをした。
僕は読みたい本を探しに、本屋へ向かい、夏美とはそこで別れた。

本屋には行ったけれど、頭の中は様々な考えでいっぱいだった。

無責任なんじゃないか？という心の声がある。

具合の悪い梨子をほうりだすのか？

梨子がかわいそうじゃないか。という声もある。

女一人、幸せにしてやれないのか？と心の中の自分が言う。。。

だけど、僕だって生きていかなきゃならないんだ。心の声が反論する。
僕まで具合が悪くなったら、それこそ生活は破綻してしまう。

子供だってほしい。でも、今の梨子が母親になったら
それこそ大変だ。

1年前、梨子は流産している。あのときは本当に辛かった。
すぐにでも次の子がほしいと思った。

だが、心に反してなぜか僕は梨子を抱くことができなくなっていた。

怖いのだ。梨子に触れられるのもいやだった。

正直、梨子とはもうセックスはしたくなかったのだ。

また、流産したときのような苦しみを味わいたくなかった。梨子の体や心も心配だった。

だがもっと言えば僕は梨子とは体が合わない。我ながら勝手だと思うけど。

だが、それを梨子に悟られたくはない。自然と夜は僕一人が遅くまで起きていることになる。

梨子は、そんな僕のことを責めたりなじったりしたし、ずいぶん泣いたものだ。

そのせいで具合もよけい悪くなったかもしれない。

それも、この頃はすっかり落ち着いた。

梨子はもう僕を欲しがったりしない。

あきらめたのかもしれない。それとも。。

クリニックの先生も、子供を持つことはよく考えたほうがいい。

今はやめておいたほうがよいだろうと言っていた。

肉体関係のあるなしに関係なく、愛情は育てていけるものだと思っていた。

けれども実際はどうだ。夫婦として暮らしてはいるものの、梨子と僕の関係は
なにかがごっそりと抜け落ちている。

お互いにそこは見ないようにしていることに気がついている。

まるでいつ壊れるとも知れないひびの入ったアンティークグラスのように。。

一緒にいることで、お互いが壊れていくような関係を僕だって望まない。

僕は梨子をほんとに愛していたのだろうか？

一緒になるべきではなかったのでは？

僕とないほうが彼女は幸せかもしれない。。

甘すぎるかな。。。自分に都合のいいことばかり考えてしまう。。。。

『情けないやつだな』そう声に出して言ってみたところで

だめなものはだめだ。

今の僕には、具合の悪い梨子と一緒にいることは辛すぎる。

家の近くまで歩いてコンビニに寄った。

ペプシとポテトチップス、それから梨子にチョコレートを一枚買った。

これから帰って話をするつもりだ。

別居の話を持ち出すというときに板チョコ一枚。。自分でも笑ってしまう。

なんて言われるかな。。と、僕はぼんやり考えた。

夏の朝

洗濯機の中でまわる色とりどりの洗濯物を見ながら
今夜の晩ご飯は何にしようかな。。と考える。

なーんて、まだ朝ご飯食べたばかりだし。
まぶしい光がベランダに差し込んで、光のつぶがキラキラ見えるようなお天気だ。
今日は、妹のシナ子と久しぶりに買い物に行く約束。
せっかくだから、晩ご飯も一緒に作って食べようかなと思ったりする。

シナ子は隣町に住んでいて、こうしてときどき一緒に過ごすことが多い。
彼女は自宅でアクセサリーを作って、セレクトショップとかに卸しているのだ。
割合と人気があるらしく、よく売れてるみたい。
近頃はあちこちでビーズ教室なんていうのも開いたりして結構まじめに働いている。

私は今のところギャラリーの手伝い（水曜日と土日）の他は何もしていない。
週に3日くらいの仕事のペースが自分には合っているように思う。
これ以上だとパニックになってしまう。
（お茶汲みと、簡単な事務だけ。。）

妹には「お姉ちゃんは贅沢だよ」と言われてる。
贅沢だなあと、自分でも思う。

ベランダに洗濯物を干しながら、今日は何を着て行こうかと頭の中で
考えをめぐらせていると、電話が鳴った。
ギャラリーからの急な呼び出しじゃないといいけど。。と思いながら、
慌てて、リビングに戻り、急いで受話器をとる。

「はい。村上です。。。」
「梨子？」

懐かしすぎる声に、一瞬息をのんだ。

蓮だった。
私の胸に何かがちくりと刺さる。
けれどもそれは自分で思っていたよりもずっと
やわらかい。

「元氣そうだね。」
「ええ。」と、答えながら鏡に映った自分の顔を見た。
化粧っけのない顔はまああるく、妹にお月様とからかわれている。
悪くないんじゃない？心の中でそうつぶやいてみる。

耳元で蓮の音がすることが不思議だ。
あれから、もう3年が経つ。
またたく間に記憶は彼方へと飛んでいく。

3年前、蓮と私は離婚した。

嵐のような日々だった。

あの日、いつものようにおやつを用意して蓮を待っていると今日のように電話があったのだ。

もちろん蓮からだ。

話たいことがあると言う。

なんだか、いつもと様子が違う。。。

私は胸騒ぎを覚えて、機嫌が悪くなった。

「話って何？今じゃなきゃだめ？」

電話口の蓮は、それ以上話さず、私は彼の言葉を待った。

すぐに玄関のドアが開いて、携帯を持った蓮が入ってきた。

「顔見ちゃうと切り出せないから。。」蓮は確かにそう言った。

「ドーナツ、食べる？」私はイライラしながらテーブルを指差した。

キッチンから、いれたばかりのコーヒーの香りがして

テーブルは午後の日差しを受けて明るく輝いている。おやつにはぴったりののどかな時間だ。

「梨子。。僕は、ここを出ようと思うんだ。」

自分で言ったことが信じられないとでも言うように、蓮は目をまるくしていた。

たっぷり1分は沈黙があったと思う。

いや、5分、10分だったかもしれない。。。

「出るって引っ越すっていうこと？」蚊の鳴くような声で聞き返す。

「違う。しばらく一人になりたいんだ。

離婚しようと言っているわけじゃないんだ。ただ、少し距離をおいたほうがお互いにいいんじゃないかと思う。わかってほしい。。」

私は胸の中がひっくり返るほど驚いていたけれど、蓮が冗談を言っているわけじゃないことぐらいは理解できた。

「そう。。」私の口から出てきた言葉もそっけない。

でも、そこまでが精一杯だった。氣をしっかりと持たなきゃと考えた途端に、ひざがガクガクして、体中の力が抜けていく。

私は捨てられるんだ。今。

もう心臓が黙っていなかった。鼓動の激しさに氣を失いそうだ。

「や・だ。。！！」それだけ言うと、涙が後から後から湧き出て止まらなくなった。

巨大な黒い塊がのどの奥から突き上げてくる。

息が苦しい。

床にへたりこんだ私を抱き起こそうともせず、蓮は話し続ける。

「ごめん。。梨子。今の僕は梨子のそばにいるのは辛いんだ。

優しくできなくてごめんな。。。」

蓮の大きな手のひらが私の頭を撫でる。

温かい。

「違う!。。優しいもん!。。蓮は優しい。。そばにいてよ。。

梨子。。のこと。。嫌い?」しゃくりあげながらやっど話す。

「そうじゃないんだよ。僕は優しくなんかないさ。。。」

つぶやくような蓮の声。まるで自分に言い聞かせるようだ。

(誰か他に好きな人がいるんでしょ?) 心の声は今にも爆発しそう。。。

けれども、こんなこと聞いて「そうだよ」って言われたら、私はお終いだ。

それだけは聞けなかった。

心の中の紫音を必死で呼ぼうとしたけれど、泡立つ感情がかき消してしまう。

私は立ち上がると、キッチンへ向かった。

冷蔵庫からワインの瓶を取り出す。

昨日の残りだ。

瓶ごと飲む。ごくごく。。

蓮が険しい顔で私から瓶を取り上げた。

「やめろよっ!」いつになく激しい口調だ。いままでも

こんなことはよくあった。

泣いてお酒を飲むと、蓮は怒る。

それでもしばらくすると、私を抱きしめて「もうやめなさい。」って

優しく諭してくれた。

でも、その日は違った。

すごい剣幕で蓮は私を平手でぶったのだ。

頬がひりっとする。

反射的に、私は寝室へ走って行き、自分のクローゼットを開ける。

ここには蓮に内緒でウォッカが隠してあった。

ウォッカはにおわないから、隠れて飲んでも彼は気づかなかった。

でもそれも今日で終わりかもしれない。

ウォッカの瓶を手に取ると、そのまま口に運ぶ。

蓮は寝室の入り口で、私を黙って見ていた。

私は蓮を睨み付けながら、ウォッカをあおった。

怒り狂った蓮は今にも飛びかかってきそうだ。

蓮がこぶしを握るなんて、はじめてだ。

私は殴られると思ったけど、逃げようとはしなかった。

だが、すぐに蓮の目から怒りの炎が消えた。

見る間に瞳から光が消えていく。。

「僕は君のそばには いられない。。」彼は泣いているみたいだった。

「僕は君のそばには いられない。。」私の頭の中で

蓮の言葉がぐるぐるまわっている。まるで 安っぽいメロドラマの台詞だと思う。

それでもこれは現実だ。

紫音が耳元でささやいてる。

(終わっちゃうよ。これでいいの?)

私は大声で怒鳴った。
「なんで?! なんでなの?
私の具合が悪いから? それが入らないのね。
蓮のせいじゃないよ。具合悪いのは。
それとも赤ちゃんが生めなかったから?」

蓮は黙ってかぶりを振る。とても、とても悲しそうだった。

私の口は勝手に動いて止まらない。
「好きな人がいるのね? そうでしょ。
だめよ。許さないから。。その人のところへ
私もついていくっ!! 蓮と一緒に私のことももらってもらうわっ」

そんなこと言っても蓮が納得するはずはない。
私だってわかってる。
蓮がいなくなったら、私はどうすればいいんだろう。。
こんなじゃ働くこともできない。。
まだ、世間が怖い。 何でこんなときに私の頭はこんなことを考えるんだろう?
仕事なんてどーだっていいじゃないの。。

「落ち着いたら、連絡するよ。さっき、シナちゃんには
電話しておいたから。もうすぐ来てくれるはずだ。」 蓮は暗い目をして言った。

「手回しがいいのね。。」
もう、何を言っても無駄。。私は声を限りに泣きはじめた。
今、ここで薬を飲んで死のうか。。
でも死んだら蓮に会えなくなる。仲直りできるかもしれないのに。。
仲直り。。それは素敵な考えだった。
私はその思いつきにしがみついた。
まだ死ねない。。

玄関のベルが鳴った。シナ子が来たのだろう。
蓮は、ほっとしたような顔だ。

シナ子は私の状態を見て、全てを察知し、蓮に
クリニックに電話するように指示すると
私の傍らにしゃがんで、私の肩を抱いた。

「お姉ちゃん。かわいそうに。。疲れたよね。一緒にクリニックに行こう。。」
私は「シナちゃん。。。」と言ったきり泣きくずれてしまう。
蓮のことをシナ子に説明しようとしたはずだけれど
全身にまわったウォッカのおかげで何を話したのか覚えていない。

結局その日の夕方はクリニックに行って、鎮静剤を打ってもらって帰ったらしい。
シナ子と蓮がいるので私は安心した。
家に戻ってベッドに寝かされ、夜中までぐっすり眠った。

目を覚ますと枕元のデジタルが1時を指していた。
そっと隣を見ると、蓮のベッドにシナ子が寝ている。
シナ子は寝付きが良く、私と違って一度寝たら絶対目を覚まさない。

私はそっと部屋を抜け出してリビングを覗きに行ってみた。
テーブルの上に赤い包みの板チョコが一枚と空のウイスキーグラスがある。

空腹を感じ、チョコレート出してを一口かじった。
キッチンへ行き、冷蔵庫から牛乳を出してグラスに注ぐ。一息に飲んでしまう。
のどがとても乾いている。
蓮はどこにいるのだろう？
「蓮？。。」小さく呼んでみるけれど返事はない。

誰もいない。。蓮の姿を探して、あちこち歩き回ってみたけれど
この家には私とシナ子の二人しかいなかった。

スリッパのまま、玄関を出て道路を見回してみる。
蓮の気配を必死で探し、いつもの散歩道へと急ぐ。

途中の公園のベンチには野良猫が寝そべっているほかは、
人の気配もない。
車道を車がときおり走るほかはいたって静かだ。
自動販売機の明かりが目立って賑やかで、私はのどの乾きを覚えた。
ポケットに手をいれてコインを探す。あった。150円だ。

自販機でジュースを一本買って飲みながら歩く。

蓮はどこへ行ったのだろう。。私はどこへ向かえばいいのだろう。。
不安がつぎつぎと頭をもたげる。
考えてみれば、私は蓮のことを何も知らなかった。
蓮がどんなところへ出かけていくのか？
どんな友達がいるのか？
何が好きだったのか？
私は蓮をほんとに好きだったのか？
思い出そうとしても何も浮かばない。

いつだって私は蓮のことを考えていたはずなのに。。

歩き疲れて公園のベンチに腰掛け、ぼんやりとしてしまう。

夜の闇は深く、空には星がにじんだように散りばめられている。
遠くでかすかに誰かのくしゃみが聴こえた。

私はどうすればいいのだろう。。
蓮には捨てられてしまった。もう、後戻りはできない。
その現実が重く私にのしかかってくる。

こらえきれずにまた泣いた。

蓮がしてくれた優しいことのひとつひとつを思い出す。
優しく頭を撫でてくれる手のひらのぬくもり。。
キスが上手な唇。。無駄な肉のついていない、すべすべした背中。
背中に指でへのへのもへじを書いているとくすぐったいとしかれた。
わたしが作った料理に顔をしかめながらも、美味しいと言ってくれたこと。。
出かけるときはいつも私の手を握ってくれる。
お誕生日には必ず花を買ってくれたっけ

でも、私は。。私は、蓮のことを考えてあげたことが
あっただろうか？

彼は私と結婚して幸せだったのだろうか？
ふと、それまで考えたことのなかった疑問が浮かび上がり、
私は恐怖した。

ジュースを飲んで、また泣いた。
真夜中の公園は思いのほか人がいる。
何時なんだろう、夜中だというのに、犬を散歩させる人がちらほらいる。

犬をつれたおじさんが通りかかり、私をみてびっくりしている。
「姉ちゃん、どうした？こんなところで泣いてねえで、家に帰りな。」
おじさんの犬も小さくク〜ンと鳴いた。

私は「ほっといてください」と乱暴に言い、下を向く。

おじさんはなおも粘っていたが、私が動こうとしないのであきらめたようだ。
「氣いつけんだよ。何があったか知らねえが、また明日が来るっから。」
そう、言いおくと犬を連れて散歩に戻った。

私はうつむいたまま、泣き続けていた。
もう、死んだほうがラクかもしれない。。そう考えていた。

私は蓮に幸せにしてもらうつもりでいた。
そう思い込んでいた自分に気づいたことがショックだった。

どれほど泣いただろう。のどが痛かった。
まぶたはほとんど開けることができない。
自分でも顔が腫れているのがわかる。

時間はどんどん過ぎて行く。あれほど暗かった闇が変化しはじめていた。
空の中で鳥たちが鳴きはじめ、
あちらこちらで鳥の言葉をかわしている。

星たちは満点に輝やっていたが、すぐそこまできている朝に
席をゆずろうとしていた。

それは一瞬、もしくは永遠の時間の中にいるようだった。

空のはしっこの方が全体的に軽くなったように色が変わってゆく。
みるみるうちに、空が明るくなってゆき、

やがて太陽の光が一筋、雲を金色に射ぬいた。

その瞬間、

私は初めてわかった。

「明けない夜はない」のだということが。
それはつまり「終わらないものはない」ということでもある。

それは宇宙の法則だった。
しごく当たり前のことかもしれない。
けれども私にはそれがわかっていなかった。

今、私が死んだところで何も変わらない。
地球はなにごとにもなかったようにまわり続け、
やがてまた夜になり、朝がくる。

他のことも全部おんなじ。
人も家も草木も会社も、恋愛も結婚も、ありとあらゆる感情でさえも、
生まれてくるものは、やがてほうっておいても死ぬ。

永遠に変わらないものなどないのだ。

なら、どうする？ 私は自分にはじめて問いかけた。

これから、どうする？

答えは簡単だった。

帰って、お風呂に入り、眠ろう。
あとのことはその後で考えればいい。

眠りから覚めたとき、私は新しく生まれ、
そして 生き始めよう。

私はそう 信じたのだ。

「・・・いいかな？」
蓮と電話していたことを思い出し、我にかえった。
蓮は来週会おうと言っている。
この3年間、蓮とは会っていなかった。
私はすんなり「いいわよ」と返事をした。
蓮に会うなんて馬鹿げているかもしれないとも思う。
でも馬鹿でもいいじゃない。と心が言う。

なにかが新しく動き出している。
いろいろあったけれど、今こうして
私は生きている。そのことがたまらなく嬉しい。。

気づくと胸の中の小さな薔薇が眠りから目覚めようとしていた。
紫音も笑って私にささやく。
「だいじょうぶだよ」__。

これからの自分にも期待しよう。

人生は楽しむためにあるのだ。

どこからが心の病で、どこからが病気ではないのでしょうか？

このお話の主人公の梨子は情緒が不安定です。
抑鬱状態にあります。
治療を続けていますが、なかなかよくなりません。
夫の蓮もまた、梨子を気遣いながら生活していますが
ストレスから逃れられなくなり、ついに別居を決意してしまいます。

互いに相手のことを考えているようで、分かり合うことはなく
すれ違っていきます。
二人とも物事の良い面を見ることができないでいるのです。

タイトルは大好きな早瀬優香子さんの詩からお借りしました。
薔薇のしっぽという詩です。

薔薇のしっぽ

誰もいない野原の方で 薔薇のしっぽがさいてるの
目には見えない気持ちのおく 薔薇のしっぽが入り込む

或る日 自分が気づいた時 それは突然 感じる
愛する気持ち たくさんあるのに キチンと目には見えないの
体のおくの薔薇のしっぽ 心の中にさいてくるの

キチンと目には見えないけれど 確かにあるのしっている
体のなかにはえてくるから 薔薇のしっぽをまっててね
心の中の薔薇のしっぽ それはたくさんはえてるの

ベンツや星や おじいちゃんにさえ
宇宙の中の薔薇のしっぽ
怒った時は大事にしてね 薔薇のしっぽが逃げないように
だれも知らない野原の方の 薔薇の形の小さなしっぽ

二番目のあとがき

人には誰にでもしまっておきたいものや気持ちがあります。

「薔薇のしっぽ」はある夫妻の心の中にしまっている物語。
そのほんの一部をすくいとるようにして書きました。
人生を見据えて、変わっていかうとする一歩前までを描いたものです。
そういう意味でこの物語はまだ始まったばかりなのです。

今朝は冬にしてはとても暖かく感じる朝で気持ちのよい冬晴れでした。
どこまでも青い空を見上げて梨子は笑っています。
現実には彼らは物語の中の登場人物ですが、私が書いた
お話の中で確かに彼らは今も生きているのです。

2011.1.19